

大通多名於路志

分七寸三	コ	ヨ	紙	表
分一寸五	テ	タ		
分三寸三	コ	ヨ	粹	文
分三寸四	テ	タ	本	

歌多必於路志令
夫或通也。通或大也。大
也。是二故乃名之。雄雄
之。故之。遊里。小行。純作
何。大。通。志。路。村。志。成。

知人友人。大。通。志。路。村。志。
同。志。路。村。志。大。通。志。路。村。志。
知。已。知。之。知。雄。氣。知。石。
聖。魯。麻。知。雞。印。海。男。子。
少。子。里。—— 羅。王。村。志。

子。外。下。の。電。系。乃。志。路。村。志。
中。系。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
中。系。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
故。路。村。志。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
質。系。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。

冬。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
故。路。村。志。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
見。以。系。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。
知。乃。志。路。村。志。乃。志。路。村。志。

發端

シキ段はおり。
銀きせる待。
シテ、惣髪なで
つけ。唐しやう
そく。扇子持。

次第 猪牙やよつ手とか

われとも。く。おなし

穴なる遊び哉。詞是は

意氣の國より出たる通

丁と申ものにて候。我

よの中のはやり事に心

をはこび。普く娼家を

巡り。馬鹿の道をも修

行仕候。此ほどは丁國

發端

シキもあやうと茶ねぬと詰まゝ、
シテ惣髪でつけあそぶと、

梳かやうふと、かゝれども、おろ完

りも、怪ひ、是をハ、意氣の國より出たる

通丁と申ものにて候。我

や、半は心とて、普く娼家を巡り

る康の道とて、修仕候。此ほどは

の床よし原に候ひし
 が。かくべつ新らしき
 とあらまほしく候間。
 承りおよびたる唐へ渡
 り。通人とも出會仕。
 よき趣向をおもひ付
 かばやと存候。道行ワキ
 床よし原をふりすて
 〆。〆。隅田の川の
 にどりなく。今日眞崎
 よそにのみ。三圍り土
 手の鳥居迄。實にも粹
 なるけしきにて。人の

丁重の床よし原に候ひしがかくべつ
 新らしきとあらまほしく候間
 承りおよびたる唐へ渡り
 通人とも出會仕
 よき趣向をおもひ付
 かばやと存候
 道行ワキ
 床よし原をふりすて
 〆。〆。隅田の川の
 にどりなく。今日眞崎
 よそにのみ。三圍り土
 手の鳥居迄。實にも粹
 なるけしきにて。人の

心の瓦しと。屋はみゆ

れと夜なくは皆地廻

りとかわるとや。手拭

下駄は新らしく。ふら

くあるくその風情居

候とは是やらん。く

リキ詞そろくまいり

候ほとに。是ははや向

嶋とかや申候。國分ば

くくにいたさばやと

存候。シテ詞のふく

それなる通人へ申べき

との候。見申せばそ

りき詞そろくまいり
候ほとに。是ははや向
嶋とかや申候。國分ば
くくにいたさばやと
存候。シテ詞のふく
それなる通人へ申べき
との候。見申せばそ

のたけ衣物すもののとくな

る羽織はおりを着給きひ。さな

がら帯おびひろはたけの姿すがた

にて。當時のいきちよ

んおもひ深川ふかはの遊あそひを

よし原はらに品川しなかは。唐人酒どうしんしゅ

落れを一見いつけんとは。とんだ

おあんじにて候もともの

哉。よくく御心おんこころをつ

けて御覽ごらん候へ。おのぞ

みの唐からは則すなはちこゝもとに

て。唐人どうじんもやはりそれ

がしにて候もとぞやワキ詞

あつていふらんわい深川の遊ひを
よし原に品川。唐人酒落を一見とは。
とんだおあんじにて候もの哉。
よくく御心をつけて御覽候へ。
おのぞみの唐は則こゝもとにて。
唐人もやはりそれがしにて候ぞやワキ詞

是はけしからぬ事を承

り候もの哉。只御と

葉を万八とおもひ候さ

りながら。御身の名は

何と申候ぞシテ調唐人

と申うへからは。權兵

衛八兵衛にてすむべき

か。その名も陳芽漢歸

來ッキそも目の本の地

に住て。唐と睦つくそ

のいわれは詞花火のか

らか雞卵のからか。た

ゝしは我をぬけがらと

カシムどや。是はけしからぬ事を承
り候もの哉。只御と葉を万八とおもひ候
さりながら。御身の名は何と申候ぞシテ
調唐人と申うへからは。權兵衛八兵衛に
てすむべきか。その名も陳芽漢歸來ッキ
そも目の本の地に住て。唐と睦つくその
いわれは詞花火のからか。たらか雞卵の
からか。ゝしは我をぬけがらと

からすみ。洒落しやれも穴あなも

天^{てん}地^ち一^{いつ}投^なず^く。日^に月^{げつ}は^は是^{こゝ}に^{こゝ}在^ある^{なり}。一^{いつ}塵^{ちん}は^は何^{どこ}に^{どこ}在^ある^{なり}。



シテまちうたひ後シテと云所は。すぐにおはなしにしやしやう。ワキ左やう／＼。是からはやつぱり例の通りサ。今までの事は發たんかゝさん。扱手に通人。唐へ行とはそりや。おまへほんかいなア。アイ何でも行かゝつたから行かにやアすみやしねい。ア、わかい／＼。若イがやうなおたふくに。唐へゆかふなどゝは。どの三徳から出た事だへ。ヤイ／＼通丁なんじ。その心ざし有ル事を。我通りきをもつてよく知り。此處にまちうけ。留ルとは虚常すいりやうで留ルのだ。唐へ渡るはなんでも。大の点ちがい。ぐつと時直しと出たまへの。むすこかぶ。むかしもさる茶めし有。豆腐の太子のでんがく。傀儡傳と云男。日本の洒落を試んと。三兩一分をぐいがりして。路銀と温め船に乗り。長崎造は來りしに。かの倡ぶぢおごりかけ。みんな低く上座の

へ。江戸へ出よふにや銀はなし。唐へ飛ぶにやアはねはなし。川留メではなふて。唐留メに成り。科のない俊寛と來て。足すりの替り石摺をこしらへ。やすく賣ッてくらす内。海の岸へすゞみに出かけた時。釣をして居る翁と心やすく成りて。おとし咄や口合。一ツ二ツ互に國のおもしろいはやり事を聞開して。唐では詩がきつい流行やふ。私が友達の李白と云フ男は。一斗酒を飲ンで。百篇の詩を作るなどゝ。唐みへを云。日本じやア。マア何かはやりますと。翁もこゝぞと。哥がゑらく流行ます。人はかり讀でもない。蛙鴛その外。猫も杓子も。哥で暮し。夫斗か。東埔瓜。甘藷なんぞが。笛をふいてはやすやら。挑灯がものを云。うつし繪がはたらく。四國の猿が。讀うりに出ルやら。とんだ賑やかなたと云へよ。ごふらく千を費し。そしやうど

ふぞマア。哥を一首たのみの。腹つゞみ。イヤ／＼先ッ詩から先へ聞かるかやおみなべしと。口合のしたから。錢代。脱衣。否。拘。貸。半分。寐。翫。願。美。艶。ト云ければ。面黒／＼日本の哥も只こふ云とこさト。昔衣黄なる博多の帶をしてきぬ／＼に野夫下郎をする哉トよめば。扱／＼その身はいやしき釣人で。こんないきな哥をよむとは。どふりでひわ茶がとふさらさと。譽るうち。彼傀儡傳もろこしへ。一時に吹返して。四五日頭痛をわづらはした所。朝鮮の弘慶子が藥で。なおつたとさ。跡で聞ケば。扱／＼日本は大通國。おれが長崎で無錢に成つたを。能吞込風を起して一時に。路銀入らずにかへしてくれたは。去りとは情の有ル國だんりふと。或じい／＼こゝサ。又皮とよま

吉大明神の末社とやら。大鼓打とやらだそふさ。こふ云事も有事だから。妄つたに唐へ行つても。今では傀儡のよふな通も居す。とんだ惡洒落でも出會。訳もきかずやりばなしに。昔の意趣がへしでもされたら。大の屈たく其上。怪我でもしてはきつい損。こゝをおもつてわたしが留るのだ。なんと無理かへ。成ほどどふでも先生だ。故事を引ての御異見。有難。エ、所で御對面いたし。ぶなんそく才で暮そふと云もの。逆ものお世話次手に。彼大通の近道手ばやい所を御講釋が承りたいサア。ねがい。ねがいのもの新造禿。コレハ。いたみ入ったおとば。下官など大通の道そんしたなど。は。いかな。當時。表子買仕打恰好。さま。小本に出板の事故。どなたもよく御そんして。さりとて御功しや。洒落たくさん世界。角ドのと

れたると。髪の有坊主も同前トハ申セ。弘法にも筆のあやまりで。少しづつは落こばれも見へますから。惡洒落達も出来たがりますテサ。御評判のよしあしは後篇の事。先ツト通り御耳へ入れやしやうか。エヘン。まづみへでも四重でもござりやせんが。私も若い時は一ツて十五笏の。番たばこ入。一本で一貫する松魚は。あんまりめづらしくもおもひやしなんだ。そして何ンでも闇雲洒落にしやれのめし。新五左どのや。野夫太郎さんが。咄してもすりやア。不二山を詠て反魂丹を丸める心もちでございした。扱表子買も人の氣。おとなしくするものと。俠を好人と。色身で遊ぶと。さわいではかりたわいもなく。うかれる客人と。夫。に變りは有レド。道行の所で行付。先は皆んな粹不粹はねいと御神詫。したがその行ク道にも近道。廻り

道の不同が有ッて。損徳二ツの境有馬山。もちろん女郎買の道は。ふんだん金を蒔繪にして。下卑なく大まかに遊ぶものとの夢想なれども。こりやア云はずともしれしッ事。女郎の氣取り次第で金のあんまり入らぬ様に。内幕で馴染とも出来やす。コリヤかの通の仕事サ。マア。ちよつとした投入の處は。初會の女郎で聞まちの時。少々ばかりのおそいを氣をもみ。狸寐と出かけ。またぬ風で御出なさる事は。決して御無用。とんと孫子の代迄させぬ事サ。女郎買に行きなから。こねいとて直に寐入様ナ情なし。付合しらすでは埒が明キやせん。女郎が来て主ア寐さしたそふだと。立ッて行時コレくと呼ばれもしめい。また初くわいから待くたびれるほどの事なら。とんとうらなどに行事アねいから。むり寐入もききもなし。ぐい寐のすい起。奇麗に

歸る事サ。夫も女郎を寐ごかしなどは
およしなせい。何んでも空寐入で聞へ
来るを待かけとは。氣のしれたしやれ。
マアこんなころへちがいから。諸事
不洒落と名が付やす。又とても三會や
四會でうまい所は出来やせん。その
出来るのは。よく／＼向ふからは
つて来てか。但し大極の通でなければ
ねいとおぼしめせ。万事情の透た事
をしちやアいゝ事アなしサ。こりやア
女郎買の道ばかりでなし。常の付合に
も有る事。うつくしいばかりで実情が
ねい。居風片桶へ金ばくをしなやう
なもの。とかく化粧のない実付合は。
唐でも倭國でも味みがあるて變りやせ
ん。先づ大通の根元は是から生れやす
よししかへ。我身をつめて。人のいた
さをしれとは通のと葉。野夫／＼と
口きたなくおろし。跡のつどかねいみ
へなど云事は。通人のせざる所。どん

な通達でも二日でも。はじめは皆んな
野夫。生れながら通人は千人に一人も
有るか無シ。通は通でとおり。野夫は
野夫でもてる事サ。筋のいゝ野夫は惡
洒落さんよりかわいゝトサ。當世と
葉はやり着もの。中すり大く髪は少
し。まみへ細しの水茶やしやは。少
しばかりけいこすると。取りたての信
濃どのも出来やす。もてた／＼とはな
しをすりやア。ふられた救取りとさと
られるにころつかす。形りの洒落に
屈たくして。心の通は闇の礫。人のま
ね斗してくらさすと。てん／＼の思ひ
付で。ぶしやれてねい衣類も有。似合
ぬ人も有。又出来ねいものも有に。
いきちよん姿でなくつちやア通でねい
と心得るは。本の蝙蝠眼といふものサ。
こんなのちやアまた／＼大通の道へは
よつばと遠い／＼。抑通と云事は身
六藝に通するもの。七十二人との御觸

より。大通のとは流行出し。通の字の
付たもの並大鉢の事かいなア。中／＼
小サな事ちやアごせいせん。随分大キ
な用に立ねいければ大通とはいひやせ
ん。先づその印は。通し馬でも通し駕
でも心やすくはねい事サ。通夜をする
は大願有ル人。燈にあり通し。神通と
いイ天眼通と云。錢に通寶の銚有レば。
三十三間堂に通し矢の高名有。街にも
通り丁は人のしる所。大門通りもその
名は廣し。うら店でも通りぬけはむつ
かしい。諷に通小町有レば衆のうらに
通ふ神。座敷に見通し。法印に見通し。
足をばこぶ通行と云。仙人に通力。
千兩金を取ルものは大通辞なり。通俗
ものはよく分り。通用散有レば。通和
散あり。是等の通の字でよく／＼御考
へ。手前から通などゝは。おもはぬ事
／＼。人が付た通の字でなければ。交
りなしの通とは云へぬ。人をおろし

ち格子。穴を云たかるお通人は。女郎
かいに行く時も。いろ／＼工夫して。
公事訴訟に出る氣に成ッて。氣もみ入
道でいやがられる。大の野夫頭。かわ
いがらりやうとおぼしめさずと。にく
がられんよふにするがかんじん。通の
まなこ爰を。よく／＼修行して大の情
しり。大通人となりやす。とは云へ。
やつかれなど講しやくは高慢でも。何
んとしても株とおぼしめしてはきつ
い間違。

そんな世界はついぞねい事サ。ア、
喉がかわひて來た。まづ
お茶でも給べやしやふ。

大通多名於路志 大尾

蹴はつ

傳曰。士は賢下省となく。大門に入て洒落られ。女中は美態となく。湯濁や行も駒下駄を躍。誰か云。異姻家驚動なくんば大青樓俳優徒錢たらよかふと。巻舌は俵世の門口。秀句は春鶯の飛石なり。河豚の勢鯨鯨を茶になす。其某店娘妓女を徒足にするとか。所がどと精神を脱寫がごとしとは。夫諸之をいふか。男女各洒落を異にし。童子格子の汗を流し。爾納の嘆息。嗚呼隨意ならぬこそ浮氣なれと云爾

傳曰士は賢不肖と別く
大門より入る酒茶を授け
七中ハ美酒と云ふ酒湯
えりも酌む杯と懸旗う

[illegible]